

ロシアにおける多文化共生の葛藤 —ユーラシア主義をめぐる議論から—

加藤史朗

1 多民族国家ロシア

(1) ナショナル・アイデンティティをめぐる苦闘

9世紀にキーエフを中心として成立したルーシ（ロシアの古称）は、13世紀にモンゴル帝国の支配下に入る。ルーシは、その後15世紀に「タタールの軛」（モンゴルの支配をロシア史ではこう呼ぶことが多い）から脱し、モンゴルの継承国家ともいえるべきユーラシア国家を形成した。支配のシステムは帝国であった。アンシャン・レジームとしての帝国支配は、1917年のロシア革命によって打倒された。しかし、1922年に成立するソ連邦は、一面では「帝国」支配の復活であった。帝政ロシアとその継承国家ソ連邦は、こうしてますます肥大化した「国家」をつくりあげた。「ロシアは国家をつくりあげたが、ネーションを生み出すには至っていない」という帝政末期の歴史家クリュチェフスキーの見解¹は、今なお有効である。

ユーラシア主義は、1920年代に亡命ロシア人の間で生まれた。亡命ロシア人（赤色革命に反対した人々という意味で白系ロシア人ともいう）とは、「ソ連人」という疑似ネーションから排除された人々であり、彼らが主張したユーラシア主義とは、「ソ連人」に代わる「ユーラシア人」をめざす運動であった。

ユーラシア主義は19世紀以来のロシアにおけるナショナル・アイデンティティをめぐる苦闘の歴史を背負っている。ロシアにおいて国民意識の覚醒を促した大事件は、1812年の祖国戦争であった。ナポレオン軍との戦いにおいて、ロシアはフランス革命が生み出したネーション・ステートの強力な「国民軍」と対峙せねばならなかった。この体験は、戦後のロシアにおいても「国民」形成の動きを生む。不幸なことに、その志向は、1825年のデカブリスト蜂起の失敗を経て政府と知識人の間で分裂しただけではない。知識人の間でも様々に分裂する。おおざっぱに言えば政府は「官製の国民性」を鼓吹するが、十分な実効を挙げない。これに批判的な知識人の間でも意見の食い違いが、「西欧派とスラヴ派の論争」を生む。

「西欧派とスラヴ派の論争」は、近代ロシアの思考を常に規定する枠組みとなった。しかし、1860年に「東方を支配せよ」という勅命を名称とする都市ウラジヴォストークが建設され、ロシアがユーラシア国家として完成すると、従来の西欧派とスラヴ派の対立を克服しようとする動きが生まれる。汎スラヴ主義もその一つであったが、さらに広くロシア独自の「第三の道」を求めるイデオロギーとして生まれたのが、ユー

¹ Byrnes, R.F., V.O.Kliuchevskii, Indiana UP., 1995, p.xviii

ラシア主義であった²。デリダの言葉を借りて言い換えるなら、ロシアがユーラシア帝国として成立した時、19世紀以来の「西欧派とスラヴ派の論争」は「脱構築」されたのであった。

19世紀後半のユーラシア主義者を代表するのが、他ならぬドストエフスキーであった。次に挙げる文章は、彼が1856年に新帝アレクサンドル二世に宛てた「1854年のヨーロッパ事件に」と題する詩の形式をとった文章(A)と1881年に記した『作家の日記』からの抜粋(B)である。両者は、ロシアがヨーロッパとアジアの狭間にあるというジレンマを敏感に感じ取っていたドストエフスキーの屈折感をよく示している。

(A) ロシアの将来は諸君にはわからない！／ロシアの天命が諸君には見えないのか？／東方はロシアのものだ！ロシアに向かって、／幾百万の人びとが倦むことなく手をさしのべている。／奥深いアジアに君臨しつつ／ロシアはすべてに若い生命を与えている。／古代オリエントの復活は（神の命により！）ロシアがもたらすのだ。／それは新たなロシア、それはツァーリの御代、／来るべき未来の華麗な曙！³

(B) ヨーロッパの人たちがわれわれをアジアの野蛮人と呼ぶのではないだろうか。われわれのことを、ヨーロッパ人よりもずっとアジア人に近いというのではあるまいかなどという、下男根性の危惧をまず追い払う必要がある。ヨーロッパはわれわれをアジア人扱いにしているというこの羞恥心は、ほぼ2世紀近くもわれわれにつきまとっている。……ヨーロッパではわれわれはタタール人でしたが、アジアではわれわれだってヨーロッパ人です。⁴

ユーラシア主義はこうした屈折を逆手にとる。すなわち、ロシアは遊牧世界と農耕世界の相剋の中で生まれたという前提に立ち、ロシア正教の中にユーラシアの多様性が融合し、ロシア文明は東西文明の精華を組み込んだものだという主張になる。ロシアのツァーリは、ビザンツの伝統の継承者であるとともに、モンゴル帝国の継承者でもあると言う見解が生まれる。

「ロシア人史家は、ロシアのツァーリは、その単語自体においても東ローマ帝国の伝統を引き継いでいると主張するが、ツァーリという名称は、古くからのハーンのロシア語訳として使用されていた。ロシアのツァーリは、まさしく、モンゴルのハーンの継承者の一人だったのである。」⁵

(2) ロシア革命とユーラシア主義の誕生

² 大木昭男「ロシアにおける「第三の道」としてのユーラシア主義」、南塚信吾編『近現代西洋史における「第三の道」論の史的展開に関する研究』（平成14年度～平成16年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書）、平成17年、93-104頁参照。

³ 『ドストエフスキー全集』第25巻（染谷茂・原卓也訳、新潮社、1980年）、392頁。

⁴ 『ドストエフスキー全集』第14巻（小沼文彦訳、筑摩書房、昭和45年）、379～384頁。

⁵ 宮脇淳子「ロシアにおけるチンギス統原理」、『ロシア研究』No.58、1996年、20頁。

1921年、ブルガリアのソフィアで言語学者のN・S・トルベツコイ、地政学者のP・N・サヴィツキイなどにより『東方への脱出』と題する論文集が出版された。現代ユーラシア主義運動の出発点とされる出来事である。その思潮の特徴は1927年に刊行された「ユーラシア主義」と題する綱領にまとめられている。以下に要約する。

1. 現代のロシアは、ヨーロッパとアジアの運命を決する存在である。それは第六の大陸ユーラシアであり、新しい世界文化の結節点であり、始まりである。
2. ロシアは独自の世界である。それは独立した地理的・文化的世界である。
3. 我々はスラヴ人でも、トゥラン人でもなく（我々の生物学的な先祖は、スラヴ人であったり、トゥラン人であったりするのだが…）、ロシア人である。
4. ステップはユーラシアのバックボーンである。「ロシア＝ユーラシア」は、ビザンチン文明の継承者であるとともに、遊牧世界帝国の後継者である。
5. ユーラシアで生まれた多様で異質な文化は、それを生み出した中心が既に没落した現在も「ロシア＝ユーラシア」世界の中に残っており、ロシア正教の中で一体化され、調和している。⁶

(3) ソ連評価をめぐるユーラシア主義者の分裂

ユーラシア主義者は、共産党独裁のソヴィエト政権を忌避し、亡命した人々のなかから生まれた。しかし、1922年にソヴィエト連邦が成立し、その後中央アジアのイスラム諸国が連邦に参加するようになると、ソ連というユーラシア国家は、ある意味でユーラシア主義者の理念を実現した姿を示すようになった。こうした現実を前に、ユーラシア主義者のなかで、ソ連に対するスタンスの違いが表れ、運動としての統一性が崩れてゆく。

先述の「ユーラシア主義」と題する綱領的文書（1927年）では、ソ連がユーラシア世界の統一をなしとげ、ロシア＝ユーラシア世界をヨーロッパ文化の軛から解放した点が積極的に評価される。しかしその反面で共産党による宗教と企業家精神の圧殺は厳しい批判の的となる。だがユーラシア主義は、自由競争に基づく市場経済、すなわち資本主義というシステムを認めているわけではない。共産主義はやがて資本主義に移行するとも述べている。つまり共産主義と資本主義はともにヨーロッパに由来するものであり、否定の対象である。ユーラシア主義が求める第三の道は、一種の混合経済である。

現実のロシアがネップ政策からスターリン独裁へと変化し、同時にソ連そのものが安定するようになると、各国がソ連を承認するようになり、ユーラシア主義運動の分裂と衰退は、決定的となっていった。

2 ソ連崩壊とユーラシア主義の復権

⁶ Евразиство(Формулировка 1927), *Россия между Европой и Азией: Евразийский соблазн*, М., 1993, стр. 217-222.

(1) グミリョーフの復権

1985年にゴルバチョフが登場してグラスノスチを合い言葉にペレストロイカを宣言すると、ロシアは百家争鳴状態となった。そうした中で、ソ連時代にラーゲリに収容された経験をもつL・N・グミリョーフのユーラシア主義が注目を集めた。グミリョーフによれば、現代の焦眉の課題は、大衆の意識の中にあるヨーロッパ中心主義がもたらす思考の混乱を收拾することである。

ユーラシア主義の功績は文化的・文明的多元主義を提示したことである。人類史の研究は、ヨーロッパを唯一の中心とした一つのまとまりとしてではなく、様々な風景がモザイクのように組み合わせられた全体性として初めて理解することが可能なのである。

紀元後まもない時期からユーラシアは何度か統合された。匈奴、スキタイ、突厥、モンゴル、ロシアによってである。ユーラシア諸民族は、国家建設においても精神文化におけると同様に、「単一のエトノスを超えた全体性」の中で早くから融合している。従って、ある領土問題の解決は、ユーラシアの一体性という基盤に立って初めて可能となる。

こうしたグミリョーフの主張は、冷戦の敗者として大国の地位を失ったロシアにとって干天の慈雨のようなものであった。

(2) シャフナザーロフのユーラシア主義批判

ユーラシア主義の台頭に警鐘を鳴らしたのが、ゴルバチョフ大統領補佐官を務めていたシャフナザーロフである。彼によれば、ユーラシア主義を受け入れているのは、傷つけられた民族的自尊心である。ユーラシア主義は、考え方の基礎にある前提が誤っている。ロシアと西の文明は両立できず、むしろ敵対関係にあるという前提である。またユーラシア主義者は、ロシアが世界において東西文明の媒介者という特殊な役割を担っていると強調するが、「だいたい、兩岸の人々がともにその橋を利用したがつているのか」と尋ねてみれば、その非現実性は明らかである。仲介者すなわち東西両世界の架橋者の役割を果たすには、左右兩岸の人々から敬意を受け、信頼されていることが必要なのである。だが、現在ではその敬意を生み出すのは、過去の栄光ではなく、現代文明の特徴をなしている全く日常的な物事なのだ。それは、たとえば高度のテクノロジーや、環境保護に配慮する工業、発達した情報通信網、国民に一連のサービスや住みよい条件を提供する能力といったものである。⁷

シャフナザーロフは、「ヨーロッパ共同の家」の提唱者として西欧派と言われてはいるが、彼にとって「西欧文明」とは、コモンセンスの問題であった。

3 プーチン大統領とユーラシア主義

(1) 国家主義とチェチェン問題

⁷ 『読売新聞』1996年4月22日付朝刊

1999 年末プーチンは、大統領代行に就任し、ミレニアム論文（「千年紀の境界におけるロシア」）⁸を公表した。この論文において彼は「強い国家」を再建するためには「経済と社会分野の統一的国家調整システム」の確立が必要だと主張し、エリツィン時代に泥沼化していたチェチェン問題に強硬姿勢で臨むと宣言し、翌 2000 年 3 の大統領選で勝利した。彼がロシア連邦第二代大統領として就任直後に手がけたことは、連邦構成主体 89 を新たに 7 つの行政管区に分け、各管区に大統領全権代表をおくことであった。それは、まさに帝国各地に皇帝の名代として総督を置いたことを思い起こさせる。さらに、この年 12 月ソ連国家のメロディが復活した。

こうしたプーチン大統領の政策は「国家主義」というべきものである。当面する二つの戦いは、チェチェン・ゲリラに対するものと、ペレストロイカ期に生まれた新興財閥オリガルヒに対するものである。前者では、2003 年 10 月チェチェン・ゲリラによるモスクワの劇場占拠事件が起き、二期目に入った 2004 年 9 月にも北オセチアにおける学校占拠テロで多数の犠牲が出た。その後もテロの勢いは衰えることがない。また後者では、まず、2000 年 9 月に「情報安全保障ドクトリン」に基づき国家によるメディア統制の姿勢を明確にした。続いてガスピロムやユコスといった天然ガス・石油の大会社を統制下においた。

さらに 2005 年はじめから連邦構成主体首長の任命制を行うなど、まさに「皇帝」による「帝国支配」の復活を思わせる⁹。

(2) ネオ・ユーラシア主義の台頭

プーチンの目指すところは大国ロシアの復活である。ロシア大国主義の先兵を目指す動きの中には、コサックの台頭、ナショナル・ボリシェヴィキといったネオ・ナチの運動など様々な動きがあるが、ネオ・ユーラシア主義の動きも顕著である。ネオ・ユーラシア主義を代表するアレクサンドル・ドゥーギンは、2002 年 6 月、ユーラシア党を創設し、法務省に登録した。同党の綱領などからその輪郭を描いてみよう。¹⁰

同党に参加している人々はロシア愛国者あるいは国家主義者を自認している。そして、地政学が重視されている。すなわち世界の基本的な対立点は、大陸文明 VS 大洋文明であり、大陸文明はヨーロッパ連合、ユーラシア連合（ほぼ旧ソ連地域）、東アジア太平洋地域の三つに分類される。明らかに地政学の祖といわれるハルフォード・マッキンダー（1861-1947）の影響を受けている。

初期のユーラシア主義者と同様、ネオ・ユーラシア主義者も自由主義的市場経済の破壊力に警戒的である。市場は国益に奉仕しなければならないとして市場経済万能主義は批判され、混合経済を主張する。

ネオ・ユーラシア主義者は、ユーラシアの諸宗教（正教、イスラム教、ユダヤ教、仏教）の伝統を尊重するという。それは、ロシア人をはじめタール人、ヤクート人、トゥヴァ人、チェチェン人、カルムイク人、イングーシ人などの民族主義の共存を目

⁸ Владимир Путин, Россия на рубеже тысячелетия, 2000, http://www.rg.ru/anons/arc_1999/1231/10.htm

⁹ 中村逸郎『帝政民主主義国家ロシア—プーチンの時代』（岩波書店、2005 年）を参照。

¹⁰ <http://www.evrazia.org/>

指す上で不可欠の態度であった。こうした論理的帰結として、国家と教会の分離は認めざるを得ないのであるが、社会と宗教の分離は認めない。なぜなら伝統的な地域共同体は、自ずから宗教性を帯びているからである。ロシアの改革は、自らのルーツとしての故郷や家族への愛から始まる。地域の独自性を拡げて言えば、ロシアはこ西洋でもなく、東洋でもない。ユーラシアという独自性を帯びている。

現今の課題は、グローバリズムとの戦いである。それは大西洋文明の基準を世界に押しつけている。アメリカ発「多文化共生」は欺瞞である。アメリカは9・11の悲劇を利用し、中央アジアに覇権を確立しようとしている。テロとの戦いを大義名分として、ロシアの勢力圏であるアジア諸地域に進出している。ロシアは、地政学的一体性を強め、オリガルヒや分離主義者と戦い、ユーラシア主義的連邦を形成しなければならない。

こうして、ネオ・ユーラシア主義は、ロシア連邦をユーラシア連邦へと発展させることによって、かつてのソ連の実体を回復しようとする。民族や宗教、あるいは地域経済の独自性を尊重するという意味で、多文化共生を主張するが、アメリカの一極支配に対抗するという意味での多元主義である。アメリカの多文化主義は、グローバリゼーションというアメリカ化のなかで欺瞞的なものだというなら、ユーラシア主義の唱える多文化共生もユーラシア化というロシア化のなかで、欺瞞的であるという誹りを免れないであろう。というのは、ユーラシア主義は、ロシアの地政学的一体性を強め分離主義者と戦うと明言しているからである。